

私にメロい、瀬
名くんは、執拗
に私を甘やか
して溶かす

王道！！佐藤目線！

【はじめに】

この話は並行世界で瀬名に攻略される私が変わる話です。

あれ？となる余計な矛盾が入りますが、物語を美味しくする仕掛けになります。それに気付けるのは物語もちちゃんと読んでくれる人だけです。

男女目線があります。sampleは佐藤目線のみです。

人物紹介

※登場人物は全員**18歳**以上です！

瀬名斗真(せな とうま)

180cm。25歳のかなりのイケメン。〇〇に惚れ込んでいる。

攻略対象が変わる事によって性格が変わっていく。

登場人物の女性社員は、全員瀬名の先輩。

佐藤綾女(さとう あやめ)

160cm。30歳の処女。女として終わったと思っていて焦っている。

自分に自信がなくて美人なのを眼鏡や無造作な髪型で隠してる美女。

地味なので女性からは攻撃されない美女。

中条真由美(なかじょう まゆみ)

155cm。佐藤と瀬名の同僚の穏やかで可愛い女の子。性格も良くて、瀬名と仲が良い。周りに合わせる可愛い系美女。見るからに可愛くて男性にチヤホヤされるので、性格がいいのに、虐められやすいが前向きに生きている健気な女の子。

朝比奈詩織(あさひな しおり)

170cm。25歳。瀬名の元クラスメイト。瀬名の親友。明るくて前向きな美人系美女。仕事がバリバリできるキャリアウーマンだが、それ故に仕事を押し付けられやすいが、イライラしながらも文句を言わずにこなす姉御肌。

「...俺のことどう思ってるの？」

耳元で甘く囁かれる一言に体が熱くなっている。

「中は、俺のこと好きって言ってるけど、どうなの？」

この人のこと大好き！！でも、それを認めるとしんどくなるだけ。

「はぁ♡ん♡はう♡」

「...可愛い♡ねえ、俺が貴方の事どう思ってるのかわかる？」

ゾクゾク！！とするような甘さのある声が鼓膜に響く。

「あ♡んんんん♡♡」

「...イツちゃったね♡」

彼とこんな関係になったのは、いつだったか、そうあれは、桜の散る春のことだった。

佐藤目線

「女として終わる！！」

佐藤綾女、29歳の私は三十路に入ろうとしていた。

29なのに処女だった。私は昔から男子に虐められることが多くて、男子が苦手で避けてきた。

未だに昔されてきたことが忘れられなくて、大人になると普通に話しかけてくれるようになったのに、ビクビクしてしまう。

眼鏡をかけて地味に猫背気味に歩く私は、男性から選ばれる事はなくて、誰からも声をかけられなかった。

女友達しかいない私は、次々と結婚する彼女達を見て焦っていた。
親からもいつ結婚するの？いい人いるの？と言われて、あはは、と苦笑いする毎日。
私だって結婚したいよ！！

4月に第二新卒として入ってきた25歳の瀬名斗真くん。彼は女子社員から、話題になる程、イケメンだった。

しかも、好青年だった。地味で目立たない私にも優しくしてくれた。

男性から優しくされた事があまりない私は、イケメンの彼に一気に落とされていた。

(...て、ムリムリ！！あんな若くて顔も性格も極上にいい人となんて！)

でも、付き合って！！

〇〇〇

「あ、佐藤さんこれやっておきましたよ！」

25歳の美人で華やかな朝比奈詩織さんは、仕事が早くて、明るくていつも笑顔な女の子だった。

それ、今日締切なのに。手が回らなかった奴！！朝比奈様！！

「え、朝比奈さんもうできたの！ 凄いね！」

「いいえ、佐藤さんが仕事教えるのが上手いんですよ！ 本当貴方が担当になってくれて私助かりました。」

ニコニコして言ってくる若くて可愛い女の子。性格も誰にでもこんな感じで、堂々としてて自信が顔に溢れていた。

朝比奈さんは人のいいところばかり見つけて褒めてくれる。皆から好かれていてモテモテだった。

勿論彼女には、地位も名誉も顔もいい婚約者がいた。

（こんな子が瀬名くんと付き合えばいいのに！）

残念で仕方がない。

.....

「あ、佐藤さん、これあげます！」

「こ、これは！！」

激レア！オタクの私が大好きなイケメンの人気アニメキャラ〇〇くんの限定グッズ！！

これ中々手に入らないのに！！

う、嬉しすぎる！！

「あ、朝比奈様！！有難うございます！！」

「いいえ、そんな。佐藤さんには本当にお世話になってるので、こんな事で返せるなら。」

え？神なのかな？マジで好きなキャラの限定版のグッズくれるとか、それを覚えてくれてるとか、彼女私に優しすぎない？

「...良かった！人が喜んでるのを見るとこっちまで幸せな気分になりますので、その顔が見ただけで私は嬉しいですよ。」

あ、朝比奈さんただの神だわ。ただ、彼女は他の人にも優しくかった。誰にでも神対応なだけだった。私にだけ優しいとか図々しいこと考えちゃった！

.....

「よっす！瀬名！」

「いって！て、詩織かよ！」

元クラスメイトで親友だという彼女達。朝比奈さんに婚約者がいなかったら、これ付き合ってるでしょ！と思った。

「アンタ前の仕事辞めちゃったんだってね？
全く要領が悪いんだから。」

「うるせえわ！俺はちょっとコツ掴むのが遅い
だけなんだよ！」

何だか瀬名くんが普通の男の子みたいに見えた。

朝比奈さんが性格がいいだけに、朝比奈さんに婚約者がいたのに、美男美女だから、付き合えばいいのに！と囁かれていた。

〇〇〇

瀬名くんと同僚の女の子、中条さんが話しているのを見た。

「なんかさ、あの二人お似合いだよね！」

気が利いて誰にでも優しい可愛い女の子。
悪口とかも言わなくて、明るくて、穏やかな最
年少の女の子だった。

「佐藤先輩！ 本当にごめんなさい！」

彼女が入ってきたばかりの時、要領が分からなくて大ミスした彼女を庇った時に、感謝された。

「ううん、これは先輩の私の責任だよ？」

「本当に佐藤さんっていい人！絶対に恩返します！」

「ええ！！そんないいのに！！」

可愛くて性格もいい女の子だった。

皆から好かれていて、悪い噂なんて聞かなくて、私に敬意の目を向けていてくれる女の子だった。

「私佐藤さんのお陰で仕事ちゃんと覚えたんで！変わりにやりますね！！佐藤さん今日早く上がりたいんですよ？」

そう言ってニコニコしながらも恩返し出来て良かった！！と言ってくた女の子だった。

アニメを生放送で観たかった私は、これほど有難いことはなかった。

マジで中条さん良い子！！

しかも、こういう事は一度だけでは無かった。

「え？う、嬉しいです！これからも私がお役に立てるなら、どんどん使ってください！」

私は段々と身近にいるかのような親しみやすい中条さんを好きになってしまった。
推しとして！

「なんなのあれ？あの子って八方美人だね。男にチャホヤされちゃってさ。」

「ホントそれ！なんかムカつくよね？」

「シフトあんまり入らないし、マジで使えねえ。」

「足引っ張ってるよね。」

彼女にそんな風に言う女の子達がいた。

...貴方達、悪口を言えば言うほど自分が醜くなるって分らないのかな？

はっ！として振り返ると、中条さんが下を向いていた。

（聞いてたのかな？）

「あ、佐藤先輩！こんな所にいたんですね！」

一瞬顔が歪んだ。聞こえてたんだと知ったけど、それでも、私には弱みを見せずにニコニコしていた。

（ま、守ってあげたい！！）

そう思って、つい私は真由美ちゃんを抱きしめてしまった。

「あんなのただのひがみだから、気にしちゃ駄目だよ！」

「...え？...もう佐藤先輩、私あんなの気にしてませんよ？慣れてるし。」

そう言って無理して笑っていた。

私の前では気丈に振る舞う彼女が健気に見えた。

〇〇〇

そして、とうとう私は30歳の誕生日を迎えてしまった。

「...女として終わったわ。」

結婚は愚か、男性との交際経験も0の私は、
喪女と言われるものになっていた。

まあ、男性と話すとビクビクしてしまうから仕方ないよね。と思った。

でも、とちらりと彼の方を見る。目が合ったのでドキッとしてしまった。

ニコッと笑顔を向けてくれる彼。か、格好いい！！

付き合って！！

佐藤君に呼ばれた場所にいくと、花束を持った彼が誕生日おめでとうございます。と言ってくれたので、有難う！と言って受け取った。

そして、チラチラと私を見てきて、モジモジと何か言いたげにするので、首を傾げた。

そして、彼は、息を大きく吸うと、私の肩を掴んできた。

「好きです。付き合ってください！」

え？と思った。は？と思った。

「うん、誠実で分かりやすくていいと思う！それで行こう！」

「...え？」

「私ね、瀬名くんの事凄い好きなんだよね。
付き合ってほしい！！」

「...は？」

「私応援する！！」

そう言うと瀬名くんはその場に座り込んで深い溜め息を吐いた。

「俺のはどうするつもりなんですか？」

「え？でも...」

一度も告白された事がなくて、リアルの恋愛が分からない私は困惑していた。

「うわー、俺初めて佐藤さんにムカついた！！」

そう言って頭をかき乱す彼に首を傾げた。

「俺は好きなんですけど？」

そう言って壁に追い込まれていた。

「え？あー、...そうだよね？」

こんな素敵な男の子と5歳も年上の30歳の私が？いやないない！

「ふーん、わかりました。...じゃあ、俺がどれだけ〇〇の事が好きなのか分からせてあげますよ。」

と言ってニツコリと笑った。え？

「あ、あの、わ、私こういうは！！」

「...イヤですか？貴方〇〇じゃないから？」

か、顔が良い！！上目遣いとか身長差があるから、普段は全然なのに、ときめく！！

は！ダメダメ！！何流されそうになってるのよ！彼は…。

下着を下ろされて、割れ目をくぱあっ♡と開かれると、そこがヒクヒクしてるのが分かって目を覆った。

「凄い、綺麗な色してる。ヒクヒクしてて、濡れてる。」

「そ、そんなこと言わなくて良いから！」

なんでこんな意地悪な事言うのよ！と恥ずかしくなってしまう。

男の子にこんな姿を晒しているのが、信じられなかった。

グチュグチュと割れ目を擦られた後にクリトリスを触られて体が跳ねた。

「やっぱりここ気持ちいいですか？」

「そ、そこ♡やだ♡」

仕掛けをした作者。

この何か矛盾する違和感のある会話は何なのだろうか？

真実は、購入後に綺麗なピースに収まります！！

極上の甘やかしをご体験下さい！！

王道に飽きてる作者が書く、捻りの入った王道！！